

1	言語	言葉の力をつけよう（音読2年③） 〔随筆「枕草子」〕	前名	解説

★知っておきたい古典の知識

『枕草子』は、清少納言によって書かれた随筆であり、紫式部によって書かれた小説『源氏物語』と並んで、平安時代の代表作品として高い評価を受けています。二つの作品は、同じ時期に宮中で活躍した女性により書かれていることもあり、よく比較されます。

二人がそれぞれの作品で使っている言葉に注目してみましょう。それは、「をかし」と「あはれ」です。どちらも「趣がある」と現代語訳されますが、ニュアンスが異なります。

をかし …… 明るく華やかな感動。
『枕草子』で四〇〇回以上使われている。

あはれ …… しみじみとした感動。
『源氏物語』で多用されている。

読んでみよう

《口語訳》

雪がとても深く降り積もったのに、いつになく格子を下したまま、炭櫃（いろいろのようなもの）に火をおこして、中宮様のもと世間話などしながら過ごしていると、「清少納言よ、香炉峰の雪はどんなでしょうね。」と中宮様がおっしゃったので、（あることをふと思い出し、そばにいた）女房に格子を上げさせて、私が御簾を高く巻き上げたところ、中宮様はお笑いになる。

（それを見ていた他の）女房たちも「そういう漢詩があることは知っているし、歌の中に詠み込んだりするけれど、今回のことは思いもしませんでした。やはり、あなたは中宮様にお仕えするのにふさわしい方なのでしょうね。」と言った。

《解説》

この話は、中宮定子が清少納言に謎かけをした場面です。「清少納言よ、香炉峰の雪はどんなでしょうね。」という謎かけに対し、清少納言は中国の詩人である白居易の「白氏文集」の中に書かれている漢詩の一部分を思い出しました。

香 炉 峰、雪 ハ ゲテ ヲル
撥 簾 看
（香炉峰の雪は 簾を撥げて看る）

そこで、清少納言は格子と御簾を上げたのです。「香炉峰の雪」が何のことなのか、中宮定子はもちろん、清少納言もわかっていなかったからこそできたやりとりです。

周囲にいた女房たちもこの漢詩を知っていたことや、和歌に詠み込んだ経験があることが描かれています。しかし、その中でも拔群の行動力を見せた清少納言は、中宮定子からはもちろん、他の女房たちから賞賛されました。

異国の言葉である漢詩を自在に読みこなし、日常生活に取り入れる平安時代の貴族の文化水準の高さには驚かされます。